

さまなるを思ふべし、またそのあたりを室といひしも、さる由にてつけたる名にやあらむ、猶他にも例多し、書紀に、越國を大八洲の一つにとりて、越洲といへるも、海は隔たらねども、彼國はいづくよりも山を隔て、別に一區なるが如くなればなるべく、筑紫の宇佐を宇佐島とあるも、山川などめぐりて、一區の地なる故なり、又應神天皇の都は、大和國高市郡の輕といふ所なるを、輕島といひ、欽明天皇の都は、師木といふ所なるを、師木島といへるなども皆同じ、此餘にも海なき國々に某島といふ地名のおほかる、多くは此例にてぞつけつらむ、その中にはかならずいぢるき界限はなき地をも、ことさらに一區としめ定めて、名づけたるも有ぬべし、それもなづくる意は同じ事なりかし。

〔日本書紀^三神武〕三十有一年四月乙酉朔皇興巡幸、因登腋上噉間丘、而廻望國狀曰、妍哉乎國之獲矣、妍哉、此云、雖奈珥夜、雖內木綿之真進國猶如蜻蛉之臂帖焉、由是始有秋津洲之號也、

〔日本書紀通證^二神代〕兼良曰、略、秋津蜻蛉之名、神武帝始呼之也、玉木翁曰、豐秋津祝饒富之名、猶以發一義、與雄略帝御歌意同、

〔日本書紀^一仁德〕五十年三月丙申、河內人奏言、於茨田堤雁、雁原作鶯、據日本紀改、產之、即日遣使令視曰、既實也、天皇於是歌以問武內宿禰曰、多莽者破屢宇知能、知能原倒、據日本紀改、阿曾、阿曾、難虛曾破、豫能等保臂等、虛曾、波區珥能、那餓臂等、阿着豆辭莽、擲莽等能區珥、珥箇利古武等、難波、企箇輸、擲、武內宿禰答歌曰、夜輪、瀨始之、和我於朋、積瀨、波于陪、儼于陪、儼和例、烏斗、波輪、儼、阿企菟、辭、摩、擲、莽等能俱、珥、箇利古武等、和例、破、積、箇、儼、儼、

〔千載和歌集^序〕あまねき御うつくしみ、秋つしまのほかまでおよび、ひろき御めぐみ、春の園の花よりもかうばし、略、下

〔下學集^上天地〕敷嶋、日本總名也、無深義、歟、愚謂、和州有磯城嶋、因之而云歟、